

# 観察強化プログラムを用いた老年看護学実習への効果

## Effects of the Observational Strengthening Program on the Learning of Gerontological Nursing Practice

高橋 順子<sup>1)</sup>

Yoriko TAKAHASHI

山本 道代<sup>2)</sup>

Michiyo YAMAMOTO

林 裕子<sup>2)</sup>

Yuko HAYASHI

### 要旨

【目的】探索的観察技術の習得を目指した観察強化プログラム（以下、観察強化プログラムとする）の導入による、老年看護学実習への効果を検討する事である。

【方法】看護系大学4年次学生の観察強化プログラムを実施した受講群と未受講群に対し、実習終了後の質問紙により、老年看護学実習目的の達成状況を調査し、比較検討した。

【結果】観察強化プログラム受講群に、「高齢者の人生背景への理解」、「高齢者の身体可動性の理解」、「高齢者の認知機能の理解」、「高齢者の生活の場・環境の理解」の4項目で有意差が見られた。「高齢者の自立についての理解」は5段階評価における3.91、「高齢者の個別性に応じた看護過程展開」は3.66の得点であった。

【考察】観察強化プログラムの導入によって、学生は実習で対象となった高齢者への理解を深めている可能性が示された。またその理解のもとに、高齢者の自立に向けた看護を展開させていた傾向が明確になった。

【Objective】 To investigate the effectiveness of introducing an observational strengthening program in a gerontological nursing lecture on the learning of gerontological nursing practice.

【Methods】 Participants were 4<sup>th</sup> year nursing students from a nursing college. We examined the extent of achievement of the goals of gerontological nursing practice using a questionnaire after the end of nursing practice, and compared the results between students who participated in the observational strengthening program and those who did not. The observational strengthening program consisted of two steps. In the first step, students were instructed to observe and describe the details of movements during daily activities in elders with disabilities, using visual and auditory learning materials. In the next step, they were instructed to observe, record, and discuss the movements of elders for 30 minutes during their 3<sup>rd</sup> year nursing practice. These activities aimed to foster the students' ability to explore and observe the potential abilities of elders, leading to the development of nursing skills to enhance the independence of elders, which is the goal of

1) 天使大学看護栄養学部看護学科

(2016年6月30日受稿、2016年12月5日審査終了受理)

2) 北海道科学大学保健医療学部看護学科

the gerontological nursing practice.

**【Results】** The student group that participated in the observational program had significantly higher scores on their understanding of four domains: the background of elders, mobility in elders, the cognitive functioning of elders, and the life space and environment of the elders. The average score on items related to the students' understanding of the independence of elders and nursing processes individualized for elders were 3.91 and 3.66 out of 5, respectively.

**【Discussion】** The introduction of the observational strengthening program was found to foster the students' understanding of elders, who were the subjects of their nursing practice. Additionally, the students were found to have developed nursing skills for supporting the elders to lead an independent life based on this understanding.

キーワード：老年看護学実習 (clinical practice of gerontological nursing)

看護学生 (nursing students)

高齢者の自立 (self-reliance of elderly people)

実習評価 (practice evaluation)

## I. はじめに

看護基礎教育において実習は講義、演習と同様に授業の一形態<sup>1)</sup>である。昨今において授業は学生による授業評価が定着し、その方法や内容について検討される機会が多い。実習もまた同様に評価を受けるものである。看護基礎教育において実習は、講義・演習と連動した教育の過程として組み立てられることが多く、その評価方法は講義・演習と連動した教育内容の評価である事が望まれる。しかし、実習終了後に行われる学生からの評価は、授業としての実習における目標に照らした評価となっている。すなわち、必ずしも講義・演習にて教授される知識・技術を、実習で受け持つ高齢者の状況と関連させながら評価されているとは言えず、課題として残されている<sup>2)</sup>。さらに老年看護学において、実習前に取り入れた教育内容を実習後の評価として検討した研究は限定されている。例えば、佐藤ら<sup>3)</sup>は、実習に生かすために事前に、受け持ち患者のイメージ化を図る演習を行っている。その演習を、演習・実習終了後のレポート分析により検討した結果、対象理解と実習に向けた原動力になったと報告している。また、古城らは<sup>4)</sup>学内演習で実施した文献抄読の教育効果を検討したが、実習への役立ちとしては評価が高くなかったことが報告された。ただし、これらはいずれも、演習そのものの評価であり、実習の授業目標との関連性について明確に検討されているわけではない。

一方、老年看護学臨地実習（以下、実習とする）における学生の困難は、実習初期の観察に関わるものである事が明らかにされている<sup>5)</sup>。すなわち学生は、要介護高齢者（以下、高齢者とする）に顕在化した状態のみを観察し、「介助を受けなければ自分では何もすることができない」存在と捉え、高齢者に内在する能力に着目できない状況にあった。また福田らは、高齢者が多様な疾病を有し、症状も非典型的であることから、学生が問題状況

にとらわれ、生活機能や社会生活などの全体像に目を向ける事が困難であると述べている<sup>6)</sup>。しかし、これから的高齢者看護に求められるものは、アプローチすることによってエンパワメント（empowerment）を生み出すことを志向する看護である<sup>7)</sup>。そのためには、従来の問題解決志向だけでなく、内在する能力を見出し、あるいは引き出せる能力が必要となる。そしてその能力の基盤となるのが、探索的な観察技術である。その観察技術を駆使して初めて、高齢者に内在する能力に気づき、高齢者の自立に向けた援助を展開できると考えた。したがって、老年看護学の教育内容において、次の2点を意図した。一つは、講義・演習と実習に共通した目的として高齢者の自立に向けた看護を明確に位置づける事。そしてもう一つには、高齢者への意識的・探索的な観察を強化するための教授内容と実践を、実習前の学習プロセスに組み入れる事であった。

これらの講義・演習における効果は、その後の実習にどう生かされたのかを客観的に評価され、初めて意味を持つ。本来、ある意図を持った講義の、実習への効果そのものを検証するのであれば、講義を受けた群と受けない群を比較検討する事が評価の妥当性を高める。しかし現実的には、受講有無の比較は学習者への倫理的な課題をはらみ不可能である。

今回、教員の交代により、偶発的に4年次学生への実習前講義に受講の有無が発生した。すなわち年度によってある意図を持った講義を受講した群（受講群）と受講しなかった群（未受講群）の差異が生じた。そこで本研究は、この機会をとらえ、高齢者の自立と、探索的観察技術の強化を意図した老年看護学の講義・演習による実習への効果を実習後の学生による評価から検討することを目的とする。

Ⅱ. 方法

1. 対象者と調査期間

A 看護系大学4年次に在籍し、実習終了後に同意を得られた学生を対象とした。20XY 年4年次学生は「高齢者に内在する能力の観察を強化する」内容の講義を受講し、3年次実習での演習(以下、観察強化プログラムとする)を経た受講群(80 名)であった(図1 参照)。観察強化プログラムを受講していない20XX 年である4年次学生を、未受講群(48 名)とした。在籍学生数は定員数変更に伴い、年度によって受講者数が異なった。調査期間は20XX 年5月～20XY 年10月までの1年5か月であった。

2. 講義・実践（観察強化プログラム）と実習の概要

1) 観察強化プログラムの実際（表1）

3年次老年看護学の1コマの講義内で認知症高齢者の生活動作場面のビデオを視聴した(20分程度)。その後、ビデオに登場した認知症高齢者の行動を、再度ビデオを確認しながら、分単位で経時的に記載する課題を課した。このビデオは、認知症高齢者が言葉で指示されただけではできなかった日常生活動作を、具体的な指示と見本動作の提示によって、可能となる場面を含んだ。ビデオ視聴の狙いは、認知症高齢者に内在する能力や生活動作が、意図的で適切な働きかけがなければ顕在化しない事を視覚的に理解する事であった。また、課題の意図は、意識しなければ見落としてしまう

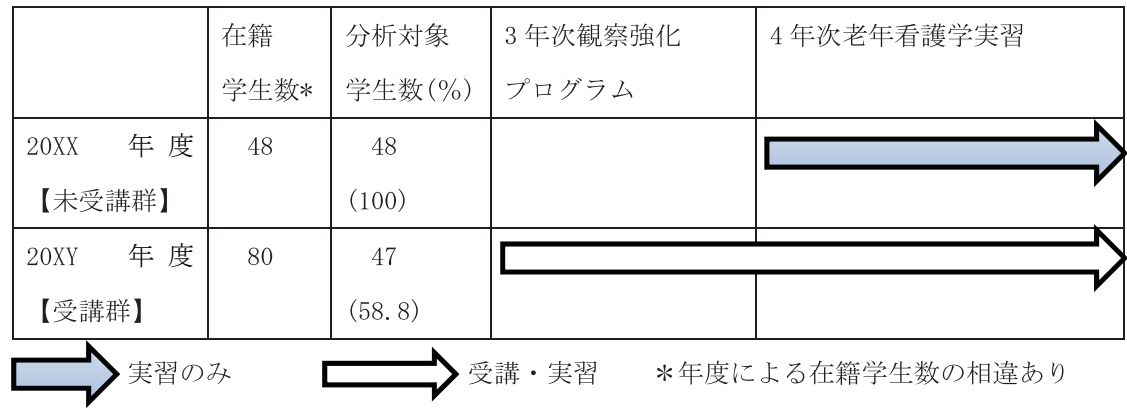


図1. 対象者と背景

表1. 観察強化プログラム（概略）

形態 内容	講義	演習
	3年次1コマの講義	3年次1週間（30時間）観察実習
探索的観察技術の基本	・高齢者の自立概念について ・認知症高齢者が、促しや見本の提示 等で動作が可能となった場面のビデオ 視聴と分単位で経時的に記載	
探索的観察技術の実践		・介護老人保健施設入所中の高齢者1 名（学生が任意に選出）の行動を30 分にわたって記録し、身体技法の概念 を用いて考察

表情の変化や細かな動作をつぶさに観察し、具現化することによる観察力の強化であった。

次に、3年次の観察実習（30時間、1単位）において、介護老人保健施設に入所する1人の高齢者の行動を30分にわたり観察し、経時的に記載する事を課題とした。さらに中島<sup>8)</sup>の身体技法の概念を用い、高齢者の行動が、高齢者の自立にどのように影響するかを分析し、自立に向けた看護について考察させた。

## 2) 実習の概要

4年次の実習は90時間、3単位であり、1人の高齢者を3週間受け持ち、看護過程を展開した。観察強化プログラム未受講群、受講群ともに同様の実習目的・目標であった。実習における教育方法として次のような指導計画を教員間で共通認識し、実践した（表2）。1週目は、受け持ち高齢者に内在する潜在能力の観察の強化、2週目には高齢者の潜在能力を引き出す関わり、3週目は、高

表2. 4年次老年看護学実習における実習目的と指導要領（概略）

【実習目的】	
高齢者は加齢による変化に加え、複数の疾病を抱えている事が多い。このような高齢者の心身機能や疾病経過の特性やその家族を理解し、個々の高齢者の自立に向けた援助を他の専門職種と連携しながら看護を展開する基礎的な能力を養う。	
【実習目標】	
1. 高齢者やその家族との援助関係を築くことができる。	
2. 加齢による変化と疾病を抱えた高齢者の自立に向けた計画を立案し、実践し、評価することができる。	
3. 高齢者に対し、尊敬の念をもって安全に安楽に看護援助の実践ができる。	
4. 自立に向けて、必要な医療・福祉サービスなどの関連職種との連携を図ることができる。	
5. 高齢者やその家族に生じている倫理的課題について考えることができる。	
6. 看護学生としての責任を果たし、主体的に学習に取り組むことができる。	

	1 週目	2 週目	3 週目
実習課題	対象者との関係形成	対象者の潜在能力を引き出す関わり	2週目の看護計画に対する評価と修正
	対象者の潜在能力の観察	対象者のケアに対する反応や状況を高齢者の自立を念頭に置きながら実践し、日々評価する	対象者の自立に向けた看護計画の立案
	対象者が実際に受けているケアを計画し、実践する		対象者の反応や状況に合わせて自立に向けた看護を展開する
指導における留意点	学生が、対象者の能力に着目した観察や、アプローチができてきているかの確認と助言指導	学生が、ケアの実践を通して対象者にとっての自立を模索し、思考されているかの確認と助言	対象者の自立に向けた看護計画が妥当なものであるかの実習側との確認と指導
	対象者が実際に受けているケアの背景（根拠）をとらえているか確認	「対象者にとっての自立は何か」の問いかけ	

高齢者の自立に向けた看護計画の立案と実践であった。

### 3. 調査方法と内容

方法は、4年次実習終了後の自記式アンケート調査を行った。

内容は、対象学生背景として、高齢者との同居経験の有無、実習以前に高齢者と接する機会の程度（「頻繁にあった」、「たまにあった」、「ほとんどなかった」の3選択肢）、実習で受け持った高齢者の認知機能の状況（「認知症無し」、「軽度」、「中等度」、「重度」の4選択肢）、身体可動性の状況（「自力での移動可能」、「車椅子・歩行器使用」、「ほとんど寝たきり」の3選択肢）を確認する項目を設けた。

また、講義・演習・実習に共通する老年看護学の目標を、オリジナルに作成した概念図にしたがって抽出した（図2）。概念図は、個別性に応じた看護過程の展開に必須である4つの構成要素を土台としている。また、土台の構成要素への理解が深まる事により、個別性に応じた看護過程が展開

でき、最終的に対象者固有の自立理解が可能になると考えた。この概念図より導き出した以下の6項目を1～5点までの5段階評価にて学生の主観による回答を求め、「非常にできた」を5点、「全くできなかった」を1点と設定した。

なお、実習場所の関係により未受講群は実習終了直後に調査を実施したが、受講群は実習終了後、1～2か月後の調査となった。

- （1）高齢者の生きてきた人生や背景への理解
- （2）高齢者の身体可動性への理解
- （3）高齢者の認知機能の状況についての理解
- （4）高齢者の生活の場、環境についての理解
- （5）高齢者の自立についての理解
- （6）高齢者の個別性に応じた看護過程の展開

### 4. 用語の操作的定義

本研究における老年看護学の目標の中心概念である「高齢者の自立」を以下のように再定義する。

「高齢者の自立」とは、内在する能力の維持、拡大を目指すことであり、生活動作のみならず、精神的な自己決定を含む広い概念とする。

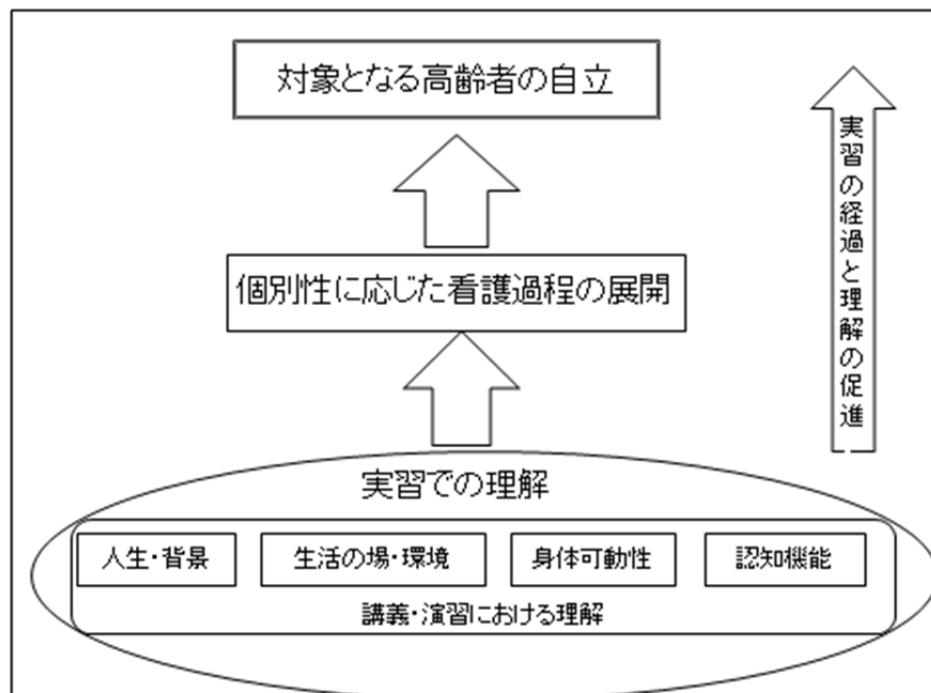


図2. 高齢者の自立を目指す老年看護学実習目標概念図



また「探索的観察技術」とは、現象をそのまま観察することだけではなく、対象者のできる事、できそうな事を注視すること、あるいは介入を試みて言動を引き出すような関わりの総体を指す。

## 5. 分析方法

データの分析は単純集計し、データ数が少数であることから、対応のない2群間の検定としてノンパラメトリック分析Mann-WhitneyのU検定を用いた。統計的有意水準は5%とした。また統計処理にはSPSS (16.0J) for Windowsを用いた。

## 6. 倫理的配慮

単位認定者ではない筆者が、次の2点を口頭にて説明を実施し、さらに調査用紙に明記した。1点目は、調査用紙は無記名であり、個人が特定されることはない事。2点目として、成績とは一切関係せず任意であり、協力しないことによる不利はない事であった。また、調査者が不在の状況で提出可能とし、調査用紙の提出をもって同意したものとした。

# Ⅲ. 結果

## 1. 対象者の概要

調査用紙の回収率は、観察強化プログラム未受講群 48 名中 48 名(100%)、受講群 80 名中 47 名

(58.8%)であった。対象者の概要の性別は未受講群で男性 20.8%、女性 79.2%、受講群は男性 12.7%、女性 87.2%であった。高齢者との同居率は未受講群で「有」が 25%、「無」が 75%、受講群では「有」が 40.4%、「無」が 59.6%であった。実習以前に高齢者と接する機会が「頻繁にあった」者は、未受講群で 20.8%、受講群で 39.1%、「たまにあった」者は未受講群で 35.4%、受講群で 39.1%であり、接する機会が「ほとんどなかった」者は未受講群で 43.8%、受講群で 21.7%であり、接する機会の「ほとんどなかった」者は未受講群が多かった。また、受け持ち高齢者の認知機能の状況としては、未受講群で「認知症無し」20.8%、「軽度」の認知症 35.4%、「中等度～重度」認知症は 43.8%であった。受講群では、「認知症無し」27.7%、「軽度」の認知症 8.5%、「中等度～重度」認知症は 63.8%であり、受講群では「軽度」の認知症が最も少なかった。また両群とも「中等度～重度」認知症のある割合が最も多かった。受け持ち高齢者の身体状況としては、未受講群、受講群ともに「車椅子・歩行器使用」である日常生活を送る高齢者が最も多く、それぞれ 72.9%、61.7%であった。また、2群間の属性においては「受け持ち高齢者の認知機能の状況」のみに有意差が見られた(表3)。

表3. 対象者の概要

項目	未受講群 n=48		受講群 n=47		p値
	人	(%)	人	(%)	
性別	男性	10 (20.8)	6 (12.7)	41 (87.2)	0.412
	女性	38 (79.2)	41 (87.2)		
高齢者との同居(1ヶ月以上)経験	有	12 (25.0)	19 (40.4)	28 (59.6)	0.129
	無	36 (75.0)	28 (59.6)		
実習前的高齢者と接する機会	頻繁にあった	10 (20.8)	18 (39.1)	18 (39.1)	0.066
	たまにあった	17 (35.4)	18 (39.1)	10 (21.7)	
	ほとんどなかった	21 (43.8)	10 (21.7)		
受け持ち高齢者の認知機能の状況	認知症無し	10 (20.8)	13 (27.7)	4 (8.5)	0.007 **
	軽度	17 (35.4)	4 (8.5)	30 (63.8)	
	中等度～重度	21 (43.8)	30 (63.8)		
受け持ち高齢者の身体状況	自力での移動可能	0 (0.0)	4 (8.5)	29 (61.7)	0.101
	車椅子・歩行器使用	35 (72.9)	29 (61.7)	14 (29.8)	
	ほとんど寝たきり状態	13 (27.1)	14 (29.8)		

\*\*p<.01 欠損値あり

## 2. 高齢者の自立を目指す実習の評価得点

高齢者の自立を目指す実習の各項目による評価得点は、表4に示した。「高齢者の生きてきた人生や背景への理解」は、未受講群では平均3.29点、受講群では平均3.85点であった。「高齢者の身体可動性についての理解」は、未受講群で平均3.54点、受講群では4.34点であった。「高齢者の認知機能の状況についての理解」は未受講群で3.27点、受講群で3.87点であり、「高齢者の生活の場、環境についての理解」は未受講群で3.33点、受講群で3.94点であった。またU検定において、「高齢者の生きてきた人生や背景への理解」( $P<0.01$ )、「高齢者の身体可動性についての理解」( $P<0.001$ )、「高齢者の認知機能の状況についての理解」( $P<0.01$ )、「高齢者の生活の場、環境についての理解」( $P<0.001$ )の4項目に有意な差が見られた。「高齢者の自立についての理解」では、未受講群で3.85点、受講群で3.91点であり、「高齢者の個別性に応じた看護過程を展開できたか」について未受講群は3.33点、受講群では3.66点であった。

## IV. 考察

4年次実習にあたり、観察強化プログラムの受講群と、これらの学習をしなかった未受講群との実習後評価の比較検証を実施した。その結果、高齢者の自立を目指す実習の評価において有意な差が見られたものとそうでないものが明らかにな

った。以下にその相違に基づいて考察する。

### 1. 実習前の学生の背景

実習前的高齢者との同居経験の有無、高齢者との接する機会の頻度は、両群ともに有意差はなかった。これにより、集団としての背景に差はないと考えることができる。そのため学生の背景は、実習評価には直接的な影響を与えていないと考えられた。したがって、高齢者との同居経験や、接する機会の頻度が、学生にとって明確な高齢者像を確立する要因にはならなかったか、あるいは実習における目標の達成度には直接的に影響しなかったということが考えられる。

藤野<sup>9)</sup>の調査によれば、学生の高齢者との同居経験と実習体験の中で有意差が見られた項目は、「高齢者の予備力・適応力低下を考慮し援助を考える」の1項目のみであり、祖父母との同居経験と実習体験との関連がほとんどないことが指摘されている。本調査の結果もこの傾向を裏付けていると考えられる。ただし、本調査においては、実習の目標が「高齢者の予備力・適応力低下を考慮した援助を考える」という補完的なものではなく、「高齢者の自立を目指す」能動的なものであった。すなわち予備力や適応力低下の中でその持ちうる能力を拡大していくことが焦点となっていた。そのため、実習での高齢者との関わりは、高齢者を探索的に観察する方法が基礎となっており、今迄の日常生活において接してきた祖父母などとの関わり方とは明らかに異なったものであったことが

表4. 受講群と未受講群の実習評価得点

	未受講群 n=48		受講群 n=47		U検定	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	Z値	有意確率
高齢者の生きてきた人生や背景への理解	3.29	0.922	3.85	0.859	2.94	0.003 **
高齢者の身体可動性についての理解	3.54	0.922	4.34	0.760	4.2	0.000 ***
高齢者の認知機能の状況についての理解	3.27	0.893	3.87	0.85	3.21	0.001 **
高齢者の生活の場、環境についての理解	3.33	0.781	3.94	0.639	3.95	0.000 ***
高齢者の自立についての理解	3.85	0.850	3.91	0.803	0.315	0.752
高齢者の個別性に応じた看護過程を展開できたか	3.33	0.907	3.66	0.788	1.643	0.100

\*\* $P<.01$  \*\*\* $P<.001$



推測できる。ゆえに従来の高齢者の見方とは明確に異なっており、目標達成度とは関連しなかったことが考えられる。

## 2. 受け持ち高齢者の認知機能と「高齢者の自立」、 「高齢者の個別性に応じた看護過程展開」

受け持ち高齢者の認知機能として、「中等度～重度の認知症」の高齢者であった学生は未受講群で43.8%、受講群で63.8%と高比率であり、有意差が見られた。これまで重度認知症の高齢者と看護学生の関わりの困難について、どう関わってよいかわからない困難が生じることが指摘されている<sup>10)</sup>。それだけ認知症のある高齢者との関わりは、学生にとって難易度の高いものであると考えられる。しかしその難易度は、本調査においては直接的に影響していないことが示された。その根拠は、受講群に「中等度～重度の認知症」を受け持った学生が多かったためである。すなわち難易度が高いと予測される状況であっても受講群は、「高齢者の生きてきた人生や背景への理解」、「高齢者の身体可動性についての理解」、「高齢者の生活の場、環境についての理解」の項目の理解が、有意に高かった。このことは、実習という体験を通して学生が、認知症高齢者への偏見を減少させ、尊厳を持つ一人の人として捉えられるようになったこと<sup>11)</sup>の影響が少なからず考えられた。また、実習における看護の展開により、関わりが困難と言われる中等度～重度の認知症のある高齢者であったとしても、対象理解の深まりが見られたと考えられた。

「高齢者の自立についての理解」、「高齢者の個別性に応じた看護過程を展開できたか」の項目において、両群での有意な差は見られなかった。ただし、「高齢者の自立についての理解」は、未受講群では最も評価点が高く、受講群でも3.91と高得点を示していた。「高齢者の自立」は生活行動のみならず、精神的な自己決定を含む広い概念として教授されていた。しかし、有意差が見られなかったことから、実習において日々問いかけられ、思

考する中で対象者を通して実感として捉えられた側面が大きいのではないかと考えられた。したがって、両群の評価点の高さは、「高齢者の自立を目指す」という目標の元、実習を展開した意図を反映した結果であるといえることができる。

一方で、「高齢者の個別性に応じた看護過程を展開できたか」の項目は、未受講群で3.33点、受講群で3.66点であった。看護過程は看護を展開する上での一つのツールであり、文章による表現の妥当性、的確性が重要視される側面もある。未受講群に比較し、受講群の評価得点平均が上回っているとはいえ、個別性に応じた看護過程の展開状況については今後の実習課題として検討すべき内容である。

## 3. 観察強化プログラムによる効果

「高齢者の生きてきた人生や背景への理解」、「高齢者の身体可動性についての理解」、「高齢者の認知機能の状況についての理解」、「高齢者の生活の場、環境についての理解」の4項目について、受講群が有意な差を示したことは興味深い。これらは観察強化プログラムの実践が、4年次実習における上記4項目に有効に作用した可能性が示されたと考えられる。このことは、一人では動くことができない重度の介護を要する高齢者であっても、学生は探索的観察技術を使い、その内在する能力に着目し、より深く理解した可能性を意味した。換言すれば、高齢者の状況が援助を受けて成り立つ生活であっても生活ができる主体的な存在であると認識する事でもあった<sup>12)</sup>。井口は、高齢者の失われた機能を強調するか、残された機能を尊重するかでケアには大きな違いが出ることを指摘し、高齢者自らが最後まで能力を精一杯使っていく事が人間としての本来の姿であると述べている<sup>13)</sup>。学生は、高齢者の反応や状況を探索的に観察したことにより、4つの項目の理解を深めた。さらにそれらの理解を根底とし、看護過程を展開する中で、残された機能をどう活用していくかを熟考し、看護を実践した。4つの項目の理解は、対象とな

る高齢者の人としての可能性に接近しようとした表れでもあると考えられる。すなわち、観察強化のプログラムによって、実習において本来の高齢者に能動的に関わることができ、より対象理解を深化させたと見ることができる。

本研究で再定義した高齢者の自立は、内在する能力の維持、拡大を目指すことであり、まさに残された機能を尊重したケアの基本となる概念である。観察強化プログラムの受講群が示した4つの項目の理解の深さは、高齢者の個別性への理解を促進する可能性を有し、実習においてより質の高いケアを提供できる素地となる事を示唆した。

#### 4. 本研究の課題

本研究の課題は、調査時期の相違によって回収率に差が出た事、学生が受け持った高齢者の身体機能、有する疾患や背景を詳細に把握できていない事である。後者は、学生の匿名性に配慮したためであったが、どのような状況の高齢者であっても同様の結果だったのかを検討しきれていない。さらに、実習評価は学生の主観的評価のみによって論じているため、妥当性に課題が残された。したがって今後、学生の同意を得た上で、高齢者の状況の差による結果の相違が生じないかの検討と、実習評価指標のさらなる検討をする必要がある。

## V. 結論

観察強化プログラムの実施群と未実施群の学生に対する、高齢者の自立を目指した実習の学生評価を比較検討した結果、以下の事が明らかになった。

1. 観察強化プログラムを実施することにより、「高齢者の生きてきた人生や背景への理解」、「高齢者の身体可動性についての理解」、「高齢者の認知機能の状況についての理解」、「高齢者の生活の場、環境についての理解」が深まったと考えられる。
2. 観察強化プログラムを基盤とした実習展開に

における高齢者理解の深まりは、高齢者の個別性への理解を促進し、質の高いケア提供の素地となる可能性が示唆された。

## 文献

- 1) 杉森みど里：看護教育学 第3版，239-240，医学書院，2000.
- 2) 高橋順子，林裕子：老年看護学実習の初期における学生の困難，疾病や障害を持つ高齢者の自立に向けた観察の視点，看護総合科学研究会誌 11（2），15-23，2009.
- 3) 佐藤美恵子他：老年看護学実習における事前に提供された受け持ち患者情報を活用した演習取り組みの効果，受け持ち患者情報から見つける看護の視点，日本赤十字秋田看護大学紀要・日本赤十字秋田短期大学紀要 17 号，13-21，2012.
- 4) 古城幸子，木下香織：老年看護学実習における学内演習方法の教育効果（その2），文献抄読演習の役立ちと学びの広がり，新見公立大学紀要，35，7-12，2014.
- 5) 高橋順子，林裕子：前掲書2）.
- 6) 福田峰子他：老年看護学臨床実習における学生の困難状況と対処行動，第一報 実習初期における困難状況の実態，生命健康科学研究所紀要，8，93-108，2011.
- 7) 宮崎和子他：看護観察のキーポイントシリーズ 改訂版 高齢者，中央法規出版株式会社，4，2006.
- 8) 中島紀恵子：系統看護学講座 専門20 老年看護学 第6版，医学書院，7，2006.
- 9) 藤野洋子：看護学生が老年観・看護実践能力を育むための実習指導を考える，老年看護学実習での体験調査から，神奈川県立看護教育大学校 看護教育研究収録，28，152-159，2001.
- 10) 宮本美佐他：看護学生が痴呆高齢者への対応で困難を感じる状況の分析，群馬保健学紀要，

22, 47-53, 2001.

- 11) 吉本知恵, 横川絹恵: 看護学生の痴呆高齢者に対するイメージと看護観および影響因, 3年生看護短大生の学習進度による比較, 日本看護学教育学会誌, 14, 1, 35-45, 2004.
- 12) 高橋順子, 林裕子: 前掲書2).
- 13) 井口昭久: これからの老年学 第二版, 名古屋大学出版会, 265, 2008.